第二十回ワークショップ（研究報告）

2012年12月26日開催

■文献[1]

須田 佑介 「脱存在論的思考とシステム理論」(2012.12)

安川 一 “Gender Advertisements, frame analysis, or sociological installation” (2012.12)

I. 「脱存在論的思考とシステム理論」（報告者：須田佑介）

■報告者 による解説

ルーマンに対してよく向けられる批判は、現状肯定維持的な理論であるというものである。しかし、ルーマンの理論をよく検討してみると、必ずしもそう言えない部分がある。特にルーマンの方法論・理論に注目すると、「システム」を含む存在の別様可能性の発見を認識利益とみなしていることが分かる。それは特に「存在論」の脱却をはかる、というルーマンの論述にみられる。同時に、システムの合理化はいかにして可能かという問いもまた、初期ルーマンの議論を特徴づけている。

社会的行為の文脈を提供するシステムの別様可能性と、その合理化の可能性は、どのように両立可能だと言えるのか。この点について、初期ルーマンの中心的な議論から検討した。（以上、ハンドアウトから抜粋）

■ディスカッションの内容

ルーマンの特殊な用語系（「システム」、「環境」、「世界」等）に関する質問（井頭）、合理性と合理性判断基準としての「複雑性の縮減」に関する質問、ルーマンとパーソンズの存在論的前提における相違とルーマンによる実際のシステム分析の評価をめぐる質問、自己言及のパラドクスと脱パラドクス化という概念装置の使用の妥当性に関する質問（以上、大杉）、後期ルーマン理論の評価に関する質問（他大院生）が提起された。

[1] 文献は、本先端研HP（http://www.soc.hit-u.ac.jp/~decontext/）から入手可。

II. “Gender Advertisements, frame analysis, or sociological installation”（報告者：安川一）

■報告者 による解説

E. ゴフマンの“Gender Advertisement”(1979)は、フェミニズム、カルチュラル・スタティーズ、ヴィジュアル・スタディーズの三つの立場から全く違う読まれ方をされてきた。本報告では「ヴィジュアルに考える（Thinking Visually）」ことを基本方針として掲げ、写真を分析したり解釈したりすることでそこに“何か”（社会や文化、実際にあるgender behaviour）の反映を読みとる代わりに、並べる・提示することを通して写真という素材にアプローチする必要性を提起した。また、そのためにヒントとなりそうな発想を提出した（参. 配布資料）。

■ディスカッションの内容

「ヴィジュアルに考える（Thinking Visually）」という研究方針に関する質問、Frame概念に関する質問、研究の射程や理論的意義に関する質問が相次いで提起された。